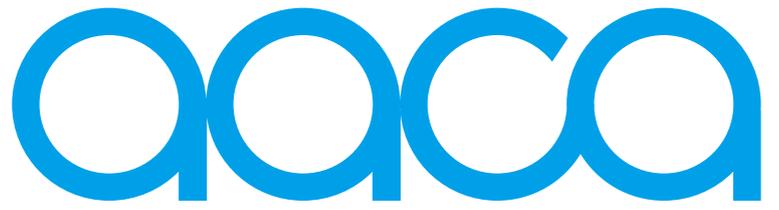
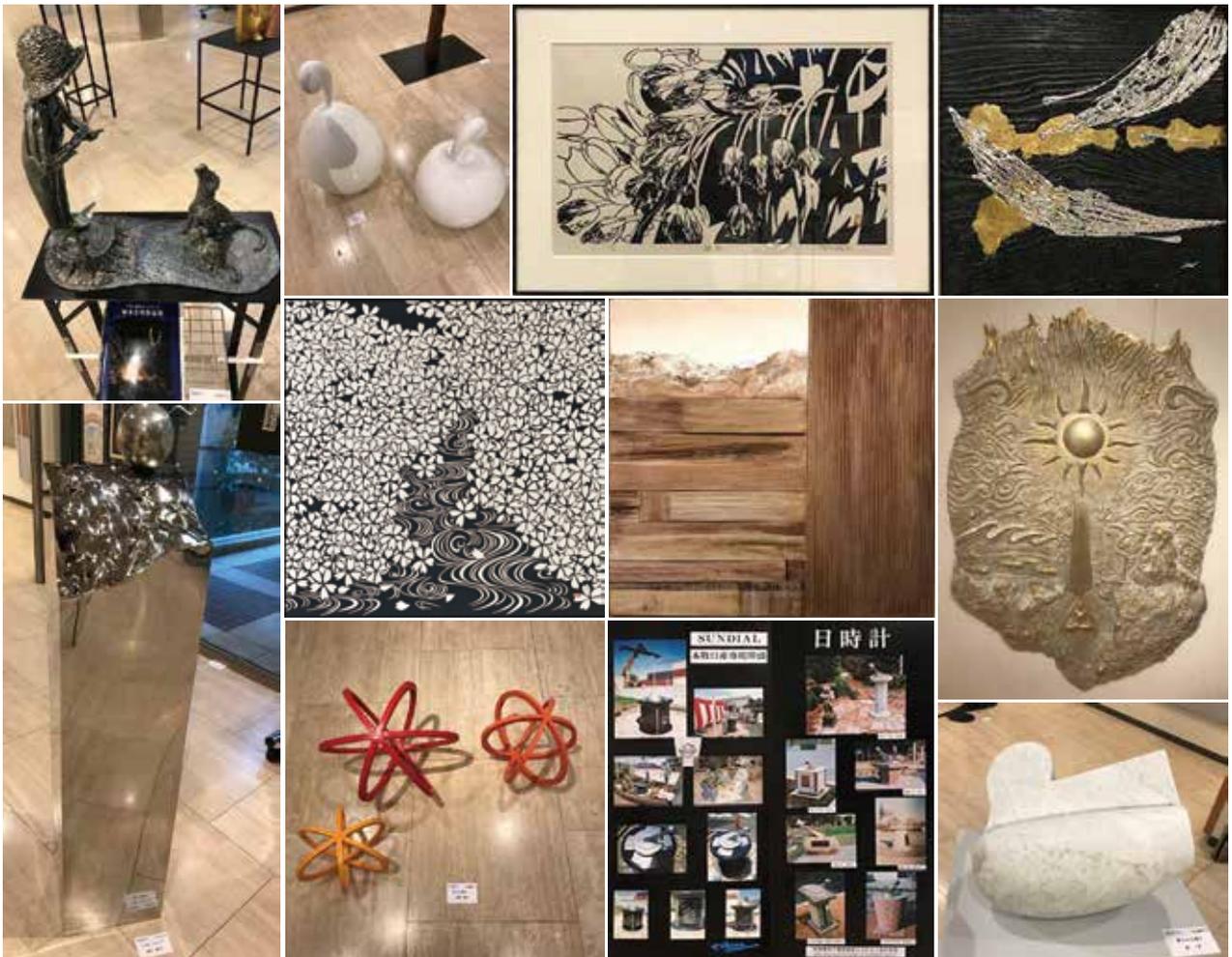


2020.4 no.87



一般社団法人 日本建築美術工芸協会



第4回 街に飛び出す作品展

1	2	3	4
8	5	6	7
	9	10	11

1. 鈴木法明  
「小さな指揮者  
(一寸まってね)」  
チタン  
w1200×h1290×d500
2. 川原 昭  
「芽ばえ」  
FRP  
Φ600×h500、  
Φ380×h870
3. 井上勝江  
「魅惑」  
木版  
w800 ×h600cm
4. 神 まさこ  
「陰陽五行」  
木(炭)・金箔・錫  
w600 ×h600
5. 井上勝江  
「もののあわれ」  
木版  
w1500 ×w1500
6. 渡辺雅夫  
「遠い憧憬」  
広葉樹・漆喰・段ボール  
w900 ×h900
7. 池田嘉文  
「海洋地形学の物語」  
FRP  
w1240 × h1770
8. 重田恵美子  
「FLOW 2006」  
ステンレス  
w400×h1450×d400
9. 加藤恵利  
「Bloom-芽吹く-」  
鉄(マケット)  
w80~130×h55~100  
×d80~130 (1/10)
10. 小原輝子  
「日時計」  
写真パネル  
w450×h900
11. 堤 一彦  
「夢をみる種子」  
カラーラ・白大理石  
w750×h800m×d600

“街なかミュゼ活動”は建築・都市空間に美術・工芸などの造形作品を取り入れ、人間性豊かな環境づくりを推し進める試みで、日本建築美術工芸協会が取り組む活動としてますます広がりを見せて展開しています。

「第4回 街に飛び出す作品展」では、南幸町3丁目計画・宮崎町計画・猫実4丁目計画・新橋5丁目計画・六角橋2丁目計画・目黒区東山3丁目計画・フレール大塚計画のスタート CAM(株)が建設した7プロジェクトに37作品の応募がありました。平成29年10月21日~28日まで建築会館ギャラリーにて「第4回街に飛び出す作品展」として展覧会を開催しました。

厩屋正選考委員長(鹿島彫刻コンクール幹事長・アートプロデューサー)により設置場所に対するパブリックアートの取り組み方を具体的に理解できるよう応募希望者に建物図面の読み解き方のレクチャーの機会を設ける試みをしました。推薦選考では、選考委員があらかじめ各プロジェクトに作品を推薦し、展覧会会期中、推薦コメントを参考にしながら設計担当者のアドバイスの中で、オーナー様に作品をじっくり検討していただきました。レセプションパーティで岡本賢会長の挨拶、オーナー様、スタート CAM(株)直井秀幸社長、選考委員の紹介があり、選考された作品11点(10名)を発表しました。選出された作家には、推薦状とスタート CAM(株)からの副賞が手渡されました。

(実行委員長 安河内敦子)



CONTENTS

■第29回 日本建築美術工芸協会賞を受賞して

AACA 賞公開審査	可児才介	4
AACA 賞 福祉型障がい児入所施設 まごころ園	山下秀之	5
芦原義信賞 (新人賞) 淡路島の住宅	末光弘和	6
AACA 賞 優秀賞 早稲田大学 37 号館 早稲田アリーナ	水越英一郎	7
AACA 賞 優秀賞 SYNEGIC office	堀越ふみ江	8
	長谷川欣則	8
AACA 賞 優秀賞 UTSUROI TSUCHIYA ANNEX	垣田博之	9
AACA 賞 奨励賞 日本橋旧テラー堀屋改修	三井 嶺	10
AACA 賞 奨励賞 ACADEMIC-ARK @OTEMON GAKUIN UNIVERSITY	須部恭浩	
	姉齒景介	
	永井憲二	11
AACA 賞 奨励賞 LA・LA・Grande GINZA	中藤泰昭	12
AACA 賞 美術工芸賞 i Liv (アイリブ)	大藤淳哉	13



▶▶ 4



▶▶ 14

■街なかミュゼ活動 第6回街に飛び出す作品展

開催報告	安河内敦子	14
推薦選考総評	南三一郎	15
推薦作品		16
応募作品		18



▶▶ 26

■会員活動レポート

魅了する糸の世界	岡本直枝	20
立体と平面	すずきあき	21
「出合う力」を信じて	上村伴子	22
ごあいさつ	永井ゆきお	23

■法人会員の設計事務所を訪ねて

株式会社久米設計 Part 1	広報委員会	24
-----------------	-------	----

■母校を訪ねて

女子美術大学・女子美術大学短期大学部 (相模原キャンパス・杉並キャンパス) 訪問	野口真理	26
---	------	----



▶▶ 28

■景観シンポジウム委員会だより

「場の力で多様な価値を繋ぐ」ということ	水越英一郎	28
---------------------	-------	----

■調査研究委員会だより

調査研究委員会視察研修報告 2019年4月26日 益子	南三一郎	29
-----------------------------	------	----

■展覧会委員会だより

『街に飛び出す作品展 現地設置作品記録展』の初開催を終えて	松田静心	30
-------------------------------	------	----



▶▶ 30

■情報文化委員会だより

「市中の山居」を探るキーが“東京の池”に?	坂上直哉	31
-----------------------	------	----

■事務局だより

		32
--	--	----

# AACA 賞公開審査

表彰委員会委員長  
AACA賞選考委員会副委員長

可児才介



一昨年 2018 年に日本建築美術工芸協会は設立 30 周年の年を迎えました。これを記念して様々な事業が行われ、多くの会員に対して協会の将来に向けての明るい展望を示すことができました。その中で AACA の主たる事業のひとつである AACA 賞の募集に際しても、記念事業として新しい試みをやってみようということになりました。一つは美術工芸賞の新設、そしていま一つが最終審査の公開です。

以前は AACA 賞の作品審査は、すべての応募作品から現地審査対象の作品を選ぶ第一次審査、その後の現地調査を挟んで、受賞作品を決定する最終選考の審査という形で行われてきました。第一次も最終も選考審査は全て非公開でしたので、外から見ると密室の中での審査ということになってしまいます。日本の建築作品にかかわる色々な賞の審査の中で、審査の一部あるいは全部を公開して行う形がこの 20 年ほどの間に多く見られるようになってきました。これは、各選考委員の発言をはじめ、選考過程の多くについて透明性を謳うことで、審査が公正にまた公平な状況の中で行われることを目指すためのものです。また応募者や観客の人達に応募作品の内容、選考委員の考え方、作品同士の比較などを理解してもらい、賞への興味を掻き立て、次回の応募への意欲を持ってもらえる等いろいろなメリットが考えられることから行われています。

2018 年の公開審査では、選考委員の間で事前に意見交換を行ったため、公開部分での議論があまり活発でなかったという反省がありました。30 周年の回だけではなく今後も継続しようということになり実施された、2019 年の公開審

査では、全く事前の情報交換を行わず、その場でいきなりの議論をしようということになりました。それぞれの作品の現地調査を担当した委員がもたらす情報もきわめて新鮮で刺激も大きく、予想以上に活発な議論が行われました。

この審査は建築会館の 1 階ギャラリーで開催しました。会場には応募者を含めて 60 名以上の観客の皆さんが集まりました。今回は作品のレベルが全体に高く第一次審査では絞り込みがむずかしくて結局例年より多い 16 の作品が現地審査の対象となりました。その作者チームが、それぞれ 4 分の持ち時間でパワーポイントを用いてプレゼを行い、さらに 2 分間の質疑応答がありました。これで、会場に居合わせた全員の皆さんが各作品の特徴や作者の設計意図などを理解できたのではないかと思います。1 回目の投票で満票を得た「まごころ園」の作品が議論の中でも優位に立ち、そのまま AACA 賞に決定。古谷誠章委員長の名司会と絶妙な差配もあって、その後順調に投票と熱心な議論を経てすべての賞が決まっていきました。公開であるがゆえに各選考委員の発言にも緊張感あふれる鋭さや勢いがあり議論が明快に進んだように感じました。当日まな板の上ののった各応募者の皆さんにも選考の過程が明快に見えることで、その結果には満足できたかどうかは別にして、それなりの納得をしていただけたのではないかと思います。突然結果を知らされる非公開の審査に比べると審査する側から見てもすっきりする方式だったと改めて感じています。したがって今後も同様に公開審査を行っていきたいと考えています。



審査会場



審査会場

● AACA 賞

福祉型障がい児入所施設 まごころ園

一級建築士事務所 山下研究室 共同主宰  
日本建築美術工芸協会会員

山下秀之



ヒダヒダにあそび、スペースにあそべず

始めに「円環構成」と「雁行」があった。次に「正方形」だった。雁行を1対1から3対1(2,730mm 対 910mm)に変更し、正方形をあてがった時、XYグリッドとの回転角度を調べると、やはり18度。勤務する大学に設計した小建築(展示館)で、正方形と十字形の回転角度は18度だった。XY方向のみに整えた平面線群を細かく雁行させ、中庭を取り囲む「円環構成」を描いた。建設地の近くの出雲崎、3.6kmの長さで妻入り町屋が連なる。街道沿いに、直線にそろう家形のファサード群に対して、海側の不揃いなファサード群。その乱雑な雁行ぶりは、かつて、海しぶきを浴びた海に張り出す舟屋だった。全貌を見下ろす高台に、歌碑がある。

淡雪の中にたちたる 三千大千世界  
またその中に 沫雪ぞ降る

出雲崎は、良寛。雪降る中に雪が降る。その重力場は紙芝居となり、はらはらとめくれ、居る者は奥に引き込まれる。「行き着く先」は、居たばかりの「入り口」か。空間の再帰性や、めくるめいた入れ子構成や、画像のフィードバックループに魅せられ、「Related Space」(1989年/映像情報のリアルタイム ネットワークシステム)、「NestedCube in Process」(1994年/住宅)、「Info-Domino」(1994年/空間コンセプト)を考えた時、紙芝居が「空間のヒダ」であることを再認識した。構造フレームも、画像フレームも、空間となってヒダ状に円環をなす。「ヒダヒダにあそび、スペースにあそべず」。大学の講義で20年前から使っている表現を、そっくり、学園の設計コンセプトに掲げた。ヒダとヒダの間に、子供たちが見え隠れした時、温度を持たない図形が、温度を持ちはじめ、ヒダが「家」になり、ヒダの重なりが「路地」となり、「町」になった。

社会的共通資本としての「終の住処」「ユートピアのあり方」を、実践的かつ学問的に追い求めたプロジェクトだった。小建築の群集合/単体建築が町そのもの/硬い単体建築ではなく柔らかい里山の集落/監視空間ではなく気配を感じる空間、そこで暮らす知的障がいや育児虐待や育児放棄の子供たちの心に、今、春のような季節が訪れている。これまでにない施設づくりを望んでいた学園長である金安良則氏は、「直線的で、のっぺりしたこれまでの空間は、利用者

同士の接点の多いことからトラブルが多発していたが、(学園では)劇的にトラブルが減少した」「(近年の)盲目的な小舎制のユニット型は、家庭的だといわれる一方で、子供同士のコミュニティを閉鎖的に縮小してしまうといった意見がある」「回遊性のない行き止まりのサテライト型では、必然的に交流が縮むように思う」と言う。そして、円環をなすヒダ状の木質空間を、「解決策と確信した」と言う。言及が、まちづくりやコミュニティデザインの観点と整合している。教え子である武井奈津美の修論「みちくさ空間の研究」はもちろんのこと、J・ジェイコブズの「都市が多様性を持つための条件」を読み返した時、たとえば、「角を曲がる機会が頻繁に生じていなければならない」など、学園と見間違える思いをした。



54m 正方形、木造平屋、XYグリッドとの回転角度18度(撮影:佐武浩一)



長岡造形大学展示館「MaRouの杜」2F平面図



いる壁廊下、13色のランダム配列による家並み(撮影:山下秀之)



スヌーズレン見上げ、知覚向上のための小空間(撮影:木田勝久)



中庭と家並み、夏は昆虫取り、冬は雪遊び(撮影:山下秀之)



左は既存、右が新築、越後平野が広がる(撮影:木田勝久)

## ● 芦原義信賞（新人賞） 淡路島の住宅

株式会社 SUEP 代表取締役  
日本建築美術工芸協会会員

末光弘和



この度は、日本建築美術工芸協会芦原義信賞をいただき、大変光栄に存じます。選考していただきました委員の皆様には厚く御礼申し上げます。

今回、受賞の対象となった「淡路島の住宅」は、淡路島の北端に位置し、海岸からほど近く、明石海峡大橋を望む眺望のよい高台に建つ戸建住宅である。神戸の都心にも自然にも近接した場所で、高いデザイン性と同時に自然エネルギーと自然素材を最大限利用した ZEH（ゼロエネルギーハウス）が求められた。

敷地は島の東海岸に位置するため、住宅を眺望のよい海側に寄せて南北方向に細長いヴォリュームを配置し、全部屋から海を感じられる平面計画とした。断面は2階を主階として、室内と一体的な大きなテラスを設けている。東側に開かれた建物は眺望を得られる反面、午前中の浅い角度の日射により夏の日中には室内がオーバーヒートしてしまう。そこで建物の外側にもうひとつの外皮を重ね、ダブルスキンの空間をつくった。日射を遮蔽しながらプライバシーを気にせず、窓を開けて風を通すことができる。

海は膨大なクールエネルギーの塊であるため、海上気温は、陸上気温に比べて平均気温が4度ほど低いと言われている。ここでは、日射遮蔽による躯体表面温度の制御と住空間への海風の取り込みを組み合わせによって涼しく快適な半屋外環境を実現している。計画に際し、この地域の広域の風がどのように吹いているかを CFD シミュレーションによって確認し、それに

基づいて室内の風環境を丁寧に読み解きながら開口部のデザインを検討した。また、これらの体感温度を SET\*によって評価している。（SET\*とは、空気温度・放射温度・湿度・風速・着衣量・代謝量を加味した総合的な体感温度指標である。今回、瓦による日射遮蔽効果を検証するため、日射を加味した放射温度を算出するため CBE（Center for the Built Environment）による論文を参照した。）瓦がなしのケースでは、テラス（1）に日射が降り注ぎ、SET\*は30℃を超えてしまうが、瓦ありのケースでは直達日射が遮蔽され、かつスタディールームを介して流れる風によって体感温度が下がり、SET\*は25℃前後に抑えられている。

ダブルスキンの外皮は、特注形状の淡路瓦でつくられている。淡路島は土の質がよく、日本三大瓦の産地として有名である。淡路瓦の職人と協働し、環境シミュレーションによって導き出された3D形状を型に落とし、約3,000枚の瓦で覆った。この瓦は、夏・冬の平均日射角度から算出された、ねじれた形状をしており、夏の日射を遮蔽し、冬の日射を取り込むようになっている。比熱の大きな瓦は、真夏でも、裏面の表面温度が35℃前後に保たれ、木陰の葉っぱの表面温度が30℃前後で涼感を生むのと同様に、涼しい物体に包まれることで、快適な輻射環境を生み出している。1階の外壁も淡路の土壁とし、瓦と合わさって海岸の岩肌とも調和する、この地の風土に即した外観とした。

建物は高い断熱性能、高性能サッシによる躯体性能に加えて、様々な自然エネルギーを利用することで、建物全体の年間消費エネルギー量がゼロになるように計画している。この地域での標準的な住宅のエネルギー消費量に対して、断熱性能と瓦のダブルスキンによって45.9%、地中熱利用とプール水の熱利用で22.3%の消費エネルギー量を減らしており、さらに太陽光発電パネルによってゼロエネルギーを実現している。地中熱は地下50mの17 - 20℃の地熱を吸い上げて、床冷暖房として建物に循環させており、プール水の熱は1度ほどの温度差をつけて熱取得することで、建物全体の給湯エネルギーを賄っている。

自然エネルギーの利用は建物の内部に限らず、屋根で集めた雨水を利用した家庭菜園で地域の果樹を育て、瓦の廃材で外構を設え、太陽光で電気自動車を充電する。生活全体が海や地域に開かれることで、この場所ではか成し得ない豊かな暮らしと地球環境への配慮を目指した住まいである。



(撮影：中村絵)



2階テラスから大阪湾をみる (撮影：中村絵)



2階テラス (撮影：中村絵)

● AACA 賞 優秀賞

早稲田大学 37 号館 早稲田アリーナ

株式会社山下設計 **水越英一郎** 清水建設株式会社  
株式会社山下設計 **篠崎亮平** 株式会社プレイスメディア

**宮崎俊亮**  
**吉村純一**



場の力で多様な価値を繋ぐ

早稲田大学 37 号館 早稲田アリーナは、早稲田大学戸山キャンパスに位置する多機能型スポーツアリーナを中心にラーニングコモンズ等を内包する複合施設です。

本プロジェクトは、この施設の前身である旧 37 号館 記念会堂の老朽化をきっかけにスタートしました。旧 37 号館 記念会堂は、最大収容人員 約 5,000 人の大講堂と体育館の機能を併せ持った施設で、早稲田大学の卒業式や入学式等の式典会場と用いられていた他、1964 年の東京オリンピックの際にはフェンシングの公式戦会場にも用いられ、早稲田大学関係者にとって、大隈講堂に次ぐシンボル性を持った施設でした。

戸山キャンパスは、1962 年に村野藤吾先生の設計による校舎群が完成することで現在の骨格がつけられ、その後、更新を繰り返してきましたが、狭隘過密な環境故の学生達の日常的な居場所の不足、施設の老朽化、さらにはキャンパス内の敷地高低差に起因する活動の分断など多くの課題を抱えており、時代や社会のニーズに応えにくい状況となっていました。

ここでは、大学やキャンパス、さらには地域・社会が抱える様々な課題を解決するような「新たな建築モデル」を模索し、早稲田大学の未来に向けた理念を示す環境・風景・空間を構築し、それらを学生や地域の皆さんに体験して頂くことで、多くの方々と大学の理念を共有することが大切だと考えました。

具体的には、最大収容人員 約 6,000 人のメインアリーナを

中心に施設ボリュームの大半を地下に埋設し、その地表に「戸山の丘」と名付けた「第二の大地」とも呼べる、地域にも開かれたパブリックスペースを設けることで、キャンパス内に新たな交流と活動の拠点を生み出しています。「戸山の丘」は、キャンパス内の起伏に併せて 1 階レベルと 2 階レベルを繋ぎあわせ、既存施設群と接続することでキャンパス内の回遊性を高めています。

また、「戸山の丘」は、平均土厚約 100cm の植栽基盤と、この地域に生息する植物を中心とした植栽計画により、周辺地域の生態系強化やバイオフィリックデザインによるキャンパス内の知的生産性向上にも貢献しています。隣接する穴八幡宮や放生寺、さらには尾張藩徳川家の回遊式庭園「戸山山荘」の跡地である戸山公園との視覚的・環境的一体感を形成することで、「戸山の丘」が真の意味で地域に開かれた地域のシンボルとなることを意図しました。

エネルギー面では、施設の大半を地中に埋設するといった計画特性を活かし、地中熱を蓄熱・換気・空調等、様々な形で利用することで、メインアリーナおよび付帯施設は「ゼロエネルギーアリーナ」(試算値)、施設全体でも ZEB Ready (削減率 61%) の認証を受け、施設としての持続性を高めています。

ここでは、人・地域・自然・歴史を繋ぐ、ランドスケープ・アーキテクチャーの構築を通じて、大学の理念を表出することが、次世代の大学キャンパスやシンボルとしての大学建築にふさわしいと考えました。

敷地北側よりキャンパス全体を見る



北東側より見る。建物の大半を地下に埋設し、地表に新たな交流と活動の拠点を生み出した



「戸山の丘」。生物多様性に富んだ環境が地域の生態系強化やキャンパス内の知的生産性向上に貢献している



2 階 ラーニングコモンズ。施設のどこからでも自然光や緑を感じる空間を目指した

「戸山の丘」。武蔵野の雑木林をモチーフとした生活に寄り添った自然環境を意図した



地下 2 階・地下 1 階 メインアリーナ。最大収容人員は約 6,000 名。この上に「戸山の丘」が配置されている

撮影はいずれも「新建築社 写真部」です。

# ● AACA 賞 優秀賞 SYNEGIC office

ウエノアトリエ共同代表  
日本建築美術工芸協会会員 堀越ふみ江

ウエノアトリエ共同代表 長谷川欣則



## 【空間に参加する屋根架構】

木造用ビスメーカーのシネジックの新社屋新築計画である。新社屋として、木造の可能性を広げる先進的な建築であり木造建築の普及に貢献するような提案が求められた。シネジックでは一般的なデスクワークに加え、実験や外部の研究者との協働などのものづくりの業務も行われている。そこで新社屋では社員同士の働き方が影響し合い、活発な対話や連帯感が生まれるような場と社内の雰囲気をつくりたいと考え、18mの大スパントラスによる大屋根の一体空間に多様な場が遍在する計画とした。

一方で、木造建築においてはその特性上屋根に関連した架構部分が見所となり、記号としての“木”を見上げる空間体験となることが多い。ここでは木の架構を記号然として振る舞わせず、空間に参加させ、そこで行われる日常的な人の行為に関わらせたいと考えた。そこで屋根架構は時に壁として振る舞うように4隅を低くおさえ、そのなかに地形的で動きのある床を配置した。手が触れる程架構に近く覆われた場や空間の繋がりをを感じるひらいた場など多様な場所性が与えられている。それらの間に動線を巻き付け、空間の緩急、視線の抜け、多層性に誘発されてくるくると移動しながら社内の情報が混ざり合う刺激のある社屋となることを目指している。

## 【CLT の新たな可能性と極点】

立体的な屋根形状は、105 幅の住宅用集成材による平面トラスを三角形の CLT パネルで緊結することで形作られている。CLT パネルの採用で接合部の複雑な加工と特注を要する金物による接合を回避し、工場によるプレカットと現場でのビス接合という合理的な施工を可能にした。これにより壁や床に使われることが多く重い印象の CLT パネルを立体的な屋根に軽やかに用いることができ、CLT の新たな使い方を示す建築が実現できた。また CLT は 1 階の壁部分にも鉛直荷重を負担する区画壁として現して用いている。CLT 表面の風合いを大理石さながらに徹底管理した上、一般的な CLT 金物ではなく意匠性、施工性を考慮したビス接合を試みている。現時点での CLT の高コストに見合ったこれらの意欲的な工程を経て、モジュールがなく木質感をより強調する大きな CLT 壁面を吹抜空間に実現できた。今後進展する CLT の将来に向け、今回の壁面における方法は 1 つの極点を実践したと考えている。



場所ごとに人と木架構との距離が変化し、一体空間のなかに多様な場をつくっている



事務室から南を見る。屋根架構と近く覆われた空間



南より見る。街に対する圧迫感を抑えるため円形道路に対し四隅を低く抑える形状としている



事務室から東を見る。オフィス家具が置かれる前の様子



会議室よりラウンジ、事務室を見る。段上に床が連続する

## ● AACA 賞 優秀賞

## UTSUROI TSUCHIYA ANNEX



垣田博之建築設計事務所  
近畿大学建築学部准教授  
日本建築美術工芸協会会員  
垣田博之

兵庫県豊岡市城崎町は、温泉と文学の街として知られ、近年、観光客が急増している。特に、海外からの観光客はこの6年で40倍に増加した。旅行者は、岡田信一郎の設計による一の湯など、7つの外湯をめぐる歩き中で歴史ある街並みを楽しむことができる。このプロジェクトは、城崎の使われなくなった旧消防署を有効利用し、にぎわいや景観に貢献する施設をつくるために市が主催した公募プロポーザルへの応募案としてスタートし、最優秀案に選ばれ、実現したものである。

1階に城崎出身の日本画家、山田毅氏の風景画の展示スペースと一体になったカフェとデッキテラス、2階に氏の風景画のスケッチを建築に組み込んだ宿泊室を、既存建物をできるだけ生かすかたちに配置した。この地の出身である設計者にとって、山田毅氏が描く、この地域に特徴的な霧の空気感は懐かしさを憶えるものであった。川霧で、このスクエアなRCの古い建物を包むことで、木造3階建の旅館がつくりだす街並みになじませることをイメージした。

施設名称ともなっている UTSUROI は、この地の季節や風景、さらに、旅行者、歴史、街を継承する人のうつろい（移ろい、映ろい）を含意したプロジェクト・コンセプトである。クライアントで経営者の山田一輝氏は山田毅氏の甥、プロジェクトマネージャーで設計者の子供の頃からの友人、

河本善光氏は山田家の親戚である。また、施工者の谷口屋工務店、六浦祐輔氏は、つちや旅館本館をはじめ城崎の旅館を代々、地元のさまざまな職人さんと協力し維持してきた。UTSUROIはこの地で生まれ育ったプロジェクトメンバーたちの協働プロジェクトであり、施設運営のあり方と、風景画を組み込んだ建築作品が、多くの対話の中で理想的に結実した。

城崎には、駅は玄関、通りは廊下、外湯は大浴場、旅館は客室という言葉がある。街全体が一つの宿のように機能するこの街に、旧消防署の再生で生まれたこの建築が、新たな場と風景をもたらすことを期待した。竣工後、宿泊客は、欧・米・豪を中心とした海外旅行者が9割を占めて賑わいが途切れることがない。一方で、1階のカフェはデッキテラスと一体で、全国的なサイクリストイベントの前夜祭の会場となった。また、日本では東京、大阪、城崎の3箇所のみで開催された、イギリス生まれの自動車「ミニ」60周年記念イベントの場ともなった。さらに、展示スペースを舞台に使ってのニューヨーク在住のピアニストのコンサートが開催されるなど、旅行者と地域のイベントの場となってきたことも嬉しいことである。

最後に、このプロジェクトに関わってくれた多くの方々に、この場を借りて感謝申し上げたい。



宿泊客の90%が海外からの旅行者



山陰海岸ジオパークコウノトリチャレンジライド前夜祭



<MINI>60周年記念イベント IN 城崎

## ● AACA 賞 奨励賞

# 日本橋旧テラー堀屋改修



三井嶺建築設計事務所  
日本建築美術工芸協会会員

三井 嶺

### 繊細かつ装飾的な鋳鉄耐震補強による看板建築の再生

歴史的な建物において、原状を保つことと耐震補強を行うことは相反する課題である。

当プロジェクトは、鋳鉄製の装飾的な門型フレームを用いることで、間口方向の“抜け”を損なうことなく、日本橋に残る看板建築の原状回復・耐震改修を試みた計画である。

一見道楽のようにも見える計画だが、あくまで事業性重視である。建替の場合、防火地域の為 RC 又は S 造とする必要があり建設費が高むうえ、建蔽率の面でも不利になる。12階程度まで建設可能だが、建設費が高騰している現在、オフィスやマンションは利回りも悪く、事業上リスクである。結論として、改修がベストである、というクライアントの判断により計画がスタートした。

### 鋳鉄製の門型フレームによる空間の“抜け”

老朽化の進んだ昭和3年築の既存建物は解体しかないと考えたが、なんとかして残したいという施主の要望は強く、曳屋の技術をもって揚屋を行い基礎・土台を一新することにした。店舗部分の1階には、間口方向の耐力壁は無いといってよい状態であった。一般的な耐震補強では、1階は壁だらけになってしまい、間口いっぱい開口をもつ原状の姿を保つことは困難である。そこで、鋳鉄製の門型フレームを用いることで、間口方向の“抜け”を損なうことなく耐震補強を行うこととした。

### ダクタイル鋳鉄の採用

軽量な木造を鉄で補強することを考えればかなり少量の鉄で耐力を確保できる。さらに人力で施工できる 60kg 以下を条件とすると、無駄な部分を削ぎ落とした細い網のような形状とし、必要最低限の断面寸法で地震力を負担する必要がある。

繊細な形状をシームレスに作るには、ダクタイル鋳鉄（球状黒鉛鋳鉄）が最適であった。変形性能が高く、強度も十分（降伏強度 280N/mm<sup>2</sup> 以上）であり、耐震要素の機械的性質は申し分ない。

鋳造であるため応力に合わせた自由な造形が可能で、構造的にも無駄のない計画となっている。パラメトリックモデリングツール（grasshopper）を活用した構造計算により、部材を

極限まで細くしているため、鋳物でありながら重々しさはなく、軽やかでありながら薄っぺらではない、「ざらっとした透明感」とでも表現すべき空間ができたと考えている。

### 設置作業

設置作業は計画通り人力で行うことができた。接合部はボルトでシンプルに固定されているため、実質半日程度ですべてのフレームを設置できた。

### 改変し蘇生する一

古いものに対するセンチメンタルな感情はない。古くたって良くないものもある。

思想に価値があっても質や形が良くない場合は、無理に全てを保存しようとするのではなく、改変し、現代に蘇生して引き上げればよい。

「日本橋旧テラー堀屋」では、看板建築の典型的な仕上げの一つである洗い出し仕上げの土壁が採用されていた。洗い出しの土壁では、現代ではノスタルジックな古臭さが漂ってしまう。当時の理想は西洋風のモダンな外観であり、思想を現代に引き継ぐならば、モルタルでフラットにして、真っ白に改変するのが正解だと考えた。上辺の形のみを保存するばかりが解ではなく、思想こそが受け継ぐべき大切なものだと考えている。

新旧の対比がリノベーションのセオリーではあるが、古いものの良さを引き出すためには、時には新しいものと混ぜてしまってもよいのではないかと。新しくピカピカの補強フレームを挿入すると古い木造柱はただのボロに見えてしまうため、今回は鋳鉄を素地のまま用いて古い柱の質感に寄り添わせた。

また、歴史研出身者として、超長期的な視野を持って設計に取り組むことを心掛けている。簡単に取り外せるボルトでシンプルに固定された接合部は、鋳鉄の耐震補強フレームの「スポリア」的な再利用を目論んでのことである。アールヌーヴォーを想わせる「日本橋旧テラー堀屋」の鋳物フレームは、もしかすると数百年後の歴史家を惑わせるかもしれない。鋳物部材だけが遺った暁に、どう年代が特定されるかが密かな楽しみであり、未来の歴史家との戯れを妄想している。



細い網のような門型の鋳鉄耐震補強フレームにより「抜け」のある空間を作り出す



特徴的な「看板建築」の外観をそのまま活かして再生した



敷地は12階まで建設可能だが、建設費が高騰している現在、事業性を重視して改修を選択した

## ● AACA 賞 奨励賞

ACADEMIC-ARK  
@OTEMON GAKUIN UNIVERSITY

三菱地所設計 須部恭浩(中央)・姉齒景介(右)・永山憲二(左)



本計画は、大阪府茨木市の北部の巨大な工場跡地に位置する、地域の核となるキャンパス計画です。ネット社会、AIやVRが進化し、学校に来なくても学ぶことができる時代に、大学という場はどのようにあるべきか。建築家として、人が億劫にならず、わざわざ足を運ぶような学びの場、そして、地域を活性化する拠点となる建物とすることを考えました。

建物は地上5階建て。周辺環境と動線を検討し、平面形状は5階部分を一辺130mの三角形とし、3つの頂点を下層に向けて大きく削り、1階平面を一辺50mとした逆三角錐の大架構としました。これによって埋蔵物調査範囲を最小限とし、学校要望の開学時期まで、約2年半という短いスケジュールに間に合わせる工夫をしました。三角形の頂点にあるキャンティ部の3つの軒下広場が、学生や地域の人々を内部へ誘引する象徴的な建築としたいと考えました。

ファサードは学校の校章の「桜」をモチーフに、熱環境負荷を約60%低減できる、世界初となるステンレス鋳物のエコスクリーンで建物全体を覆い、一階は高さ3mの透明ガラスで建物自身を浮遊させ、キャンパス外周部からも内部の学びの賑わいが見えるようにしました。

内部に立体的に広がる多様な居場所で人々が、積極的に集い、学び、交流できる建築をつくりたいと考えました。

1階中央部に教室で包まれた「賑わい広場」を設け、いつでも賑わいがある内部空間としました。その上部に浮遊した図書館が「賑わい広場」の象徴となり、さらに5階屋上の中央部には「天空の庭」をつくりました。図書館を中心に、各階外周部、さらに上下階へと人が、回遊、滞在できる場を設けています。回廊に配置された図書に囲まれた、まるで、本の街を散策しているかのような環境が特徴となっています。



全景夕景。建物をライトアップし、広大なキャンパスを照らす地域の行灯とした

また、対話を誘発するための仕掛けとして、残響時間も一般のホールより長くとり、周辺の会話が明瞭に耳に入らないような工夫を行っています。さらに、自然光⇄人工光、風⇄風、明⇄暗、暑⇄寒、高⇄低、柔⇄硬、賑⇄静、単⇄複、学⇄憩など、季節や時間により、利用者が自分の好みに合わせ選択できる多様な場をつくりました。どこでもWiFiに繋がリスマートフォンやモバイルPCが利用でき、人と情報のnetworkにより、コミュニケーションを活性化させる空間となり、学生たちの滞在時間を延ばすことができました。

建築の断面構成や周囲との場所性を考え、防災時には軒下広場は炊き出し、賑わい広場は情報交換、教室は避難場所として利用できるように想定しました。平常時は、建物自身をライトアップすることで広大なキャンパスを照らす地域の行灯となり、地域の核となりました。この賞をきっかけに、多くの方々に周辺の街との調和、温かな人の声に誘発される内部の賑わいなど、その場でしか感じられない空間をぜひ足を運び体感していただけたらと願っています。



1F 20×10mの大空間のアクティブラーニング



5F 屋上テラス。屋外でのコミュニケーションの場をつくった



上空から全景を見る。外壁は世界初となるステンレス鋳物のエコスクリーン



1Fの1辺50mの正三角形の賑わい広場。ICTを利用し、学生たちの滞留をうながしている



内部中央に浮遊する銀色の塊が図書館。図書館を囲むように加藍状に書架カウンターを作り人を誘引する仕掛けをつくった



図書館内3F。階段を利用した閲覧スペース



4F 図書館内教授のためのラウンジのトップライト。5階中庭に設けたトップライトから光が入り時の移ろいがかかる

## ● AACA 賞 奨励賞

# La・La・Grande GINZA

大成建設株式会社  
設計本部建築設計第一部  
設計室長  
日本建築美術工芸協会会員  
中藤泰昭



### コンクリートの板に配列された機能が形作る、 拡張された建築の境界

銀座みゆき通りから1筋入った4m道路に面する商業テナントビル。不動産価値の高い立地ですが、その接道条件と18mの高さ制限が計画に制約を与えます。貸床面積が最大となる計画を行うと、階高は約3mしか取れず、ファサードには動線として必要な避難階段・EVホール・エントランス・避難バルコニーという4つの機能が集中し、テナントと通りの接点は小さくなります。

この都市と建築の境界に起きる問題に対して、機能が固有に持つ慣習的な形やスケールを失くすことで、シームレスに繋がる透明な空間に統合することを考えました。具体的には、必要な4つの機能をファサードに並べて、機能の違いに依らず縁側質を持つひとつの形、「ファサード空間」として立ち上げました。

「ファサード空間」を構成する通りから2mの範囲は、厚135mmの薄い片持ちスラブとすることで、僅か2910mmの階高に2775mmの天井高さを確保して、テナントと通りとの接点を最大化しています。一般的な厚みを失った床は、コンクリートの板に還元されて、内部も外部も同列に許容するプラットフォームとなります。また、窓枠は鉄の塊に、手摺はガラスのプレートと鉄のバーに、階段はコンクリートのボックスに等、機能に従属する建築部材の形を素材そのままに見せること、すなわち「部材」を「素材」に還元することで、4つの機能をより曖昧なものとして、オープンな縁側質の空間に変容させました。さらに、外周に配した床の

振動を抑制するタイロッドによる構造体の反復や、通常は行わない専有部の照明設置による光のラインの貫通によって、一体的な空間としての規律が与えられています。

この建築は、「機能」が慣習的に持っている「形」を消すことをテーマとし、「部材」を「素材」に還元する手法を用いているがゆえ、要素が少なく単純です。同時に、純度、つまり空間の表面だけではなく、成分や内寸、重量や造られ方といった内面を求めることとなり、それが集約されたファサード空間の設計は、施工検討なくしては成り立たないものでした。

通常、設計者は完成時の結果を、施工者は完成までのプロセスをデザインしますが、そこを設計フェーズから横断的に取り組み、厚135mmのスラブ配筋、スチールロッドとRCスラブの接合方法を始めとし、内外を同質空間に見せるための床排水、スチールサッシのクリープ変形の対応といった課題を、言葉とスケッチで、コミュニケーションを取りながら解いていきました。例えば吊り材の施工については、解析により施工ステップごとの張力値を算出して管理を行い、結果、スラブの変形を1mm以下としています。

そうして立ち上がった透明性は、テナントが変わるたびに更新されていく商業建築の軽快で一時的なものとは異なり、薄く繊細でありながらも、機能と構造から導かれた物質の重量を伴った永続的なものです。この拡張された建築の境界が、移り行く都市と、更新されるインテリアを自然に繋ぐ風景となり、銀座の街に溶け込んでゆくことを願っています。



空間化されたファサード全景



厚135mmのスラブ



空間化されたファサード内部



都市に連続する1F

● AACA 賞 美術工芸賞  
i Liv (アイリブ)



株式会社日建設  
設計部門アソシエイトアーキテクト  
大藤淳哉

i liv は銀座 4 丁目交差点近くに建つ 14 階建ての商業テナントビルです。

設計当初建築主からは、許される容積を最大限使い切ることが当然として、安心安全で人にやさしい建物、周辺環境と調和した建物を求められました。

敷地はとても不整形な形をしていて、間口は約 9m、奥行き約 34m なのですが途中クランクしています。ここに地区計画によって高さ 66m (上部工作物 10m 含む) まで建てるのが出来ます。そうしますと塔状比約 1:9 の不安定なボリュームが立ち上がりました。これを安心安全で人にやさしい建物にしなければなりません。構造の検討が始まります。

解決策は 3 つ。第 1 に、クランクしている敷地の前後を格子リブ付きの鋼鉄製床で強固につなぎ全体で踏ん張ること、第 2 に前後 2 本のエレベーターシャフトを心棒架構として強靱にし変形を足元に集約、かつ粘性ダンパーで効率よくエネルギー吸収すること、第 3 に屋上に TMD (チューンド・マス・ダンパー) と呼ばれる重い振り子 (26ト×2 基) を置いて建物の揺れが早くおさまるようにしたこと、です。

こうした解決策が目指した目標は、大地震時に建物が揺れても敷地境界を超えないことでした。銀座という立地の特性上、隣同士の建物が近づかざるを得ないのですが、万が一の時でも隣の建物を傷つけないよう配慮しました。そのため上部に行くにつれてセットバックしています。

避難計画も工夫しました。避難上有効なバルコニーをお客様がエレベーターを降りた目の前の銀座通り側に配置し、お客様が直感的に避難方向を認識できるようにしました。ここにバルコニーを配置したことが後の外装計画に密接に繋がって行きます。

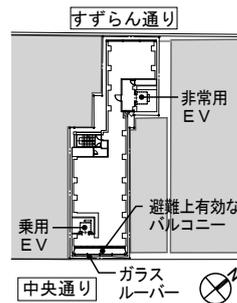
ところで、銀座では煌びやかでたくさんの建築表現が競い合っています。そんな建築群の中にこの建物が参加するとき、一体どのような可能性があるのだろうと考えました。そしてこの

特異なプロポーションをそのままにできるだけ主張せず、黙って佇む控えめな美学を極めたらどうかと考えました。そこで前面ファサードをガラスルーバーで覆いつくし液体のような表現は出来ないかと考えました。4 枚の板ガラスを合わせた厚さ 48mm のガラス延べ棒を作り、一枚一枚すべて異なるように曲線でカットし、それが連続することで水紋のようなファサードを創り出しました。この外装ではこれ以外のことを何もしていません。その結果、日中は太陽の光を反射して実に不思議な光跡が現れます。しかもその表情は見る視点や時間、天候によって刻々と移り変わって行きます。

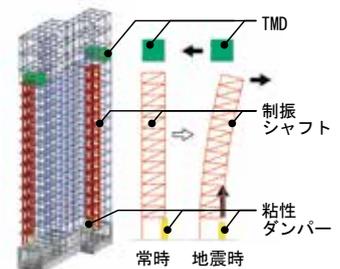
夜は先ほど触れたバルコニー空間の床、壁、軒天井を鏡面仕上げにし、床に埋め込まれた LED 照明が鏡面部分で反射して光の粒々がガラスルーバーに映り込みます。このバルコニー空間が単に避難のためだけではなく、ファサードに奥行き感を与え、幻想的な夜景を生み出す装置として機能しました。

こうして、周辺環境との調和を目指しあえて少ないボキャブラリーでデザインされた建物ではあるけれど、光の反射を利用することにより様々現象を創り出すことができました。

i liv は世界の銀座の中心でそっと建ち、ふと見上げると時々美しい表情を見せてくれる、そんな奥ゆかしい建物として愛され続けて行ければとても幸せに思います。



クランクした敷地と平面計画



心棒架構と TMD の概念図



ガラスルーバーファサード



水紋のように波打つ光



バルコニー空間



光の粒々が映り込んだ夜景



銀座 4 丁目交差点から  
(全撮影: Koji Fujii/Nacasa&Partners Inc.)

# 街なかミュゼ活動 第6回 街に飛び出す作品展

## 開催報告

実行委員長 安河内敦子

“街なかミュゼ活動”は建築・都市空間に美術・工芸などの造形作品を取り入れ、人間性豊かな環境づくりを推し進める試みで、日本建築美術工芸協会が取り組む活動として展開しています。

「街に飛び出す作品展」に出品された作品の中から建物所有者に提供していただいたスペースを展覧会場に見立て、作家作品を1年間展示し「街なかミュゼ」と位置づけ開催し、その後常設される作品も多く「街なかミュゼ」が広がりを見せています。

「第6回 街に飛び出す作品展」は2020年1月15日(水)～1月21日(火) 建築会館ギャラリー、イベント広場で開催されました。スターツCAM株式会社とオーナー様のご

協力により「街なかミュゼ」会場5か所の提供をいただき、作品47点の応募があり応募作品の中から22作品がaaca推薦委員によりノミネートされ、最終選考で10作品が「街なかミュゼ」に推薦されました。

レセプション(令和2年1月21日(火)17時～)では、推薦作家に、岡本賢会長より推薦状が手渡されました。レセプションには100名を上回る参加が有り、作品を囲んでにぎやかに交歓されました。

推薦選定された作品は、竣工に合わせて1年間の「街なかミュゼ」として、作家、設計者と共に展覧会委員の立会いのもと、設置位置や設置方法の検討をしながら、設置をします。

### ノミネート作品

#### A: 狛江市和泉本町1丁目計画

野口真理 「つちの中」  
平山健雄 「フランクロイドライトへのオマージュ」  
鈴木法明 「窓(出会う)」

#### B: 世田谷区太子堂5丁目計画

池田嘉文 「リズム オブ ラブ」  
安部大雅 「揺らめく白」  
松田静心 「種～」

#### C: 横浜市港北区菊名6丁目計画

信ヶ原良和(正面右) 「空とトンボ」  
高橋恵子 「流れ」  
高須好子 「ひかり…空」  
吉野ヨシ子 「宇」  
中嶋クミ 「Curious Tones:絆」  
鈴木法明(正面左) 「やすらぎの刻」

#### D: 浦安市富士見4丁目計画

Who+望月 勤 「終わるときは始まるとき」  
品川未知子 「青のカオス…ロマン」  
安部大雅 「光音風」  
渡辺雅夫 「求心力か遠心力か」

#### E: 江戸川区瑞江2丁目計画

水谷誠孝 「メリーゴーランドの馬と百合」  
水谷誠孝 「空をかける頭立ての馬車」  
堤 一彦 「ON THE EARTH」  
堤 一彦 「YUZURIHA」  
松田静心 「幸せを運ぶ猫と繁栄の木」  
松田静心 「種～」  
信ヶ原良和 「未来への方舟」  
安河内敦子 「井上勝江版画作品 想-6 より  
ステンドグラス」

### 推薦作品

#### A: 狛江市和泉本町1丁目計画

鈴木法明 「窓(出会う)」

#### B: 世田谷区太子堂5丁目計画

安部大雅 「揺らめく白」

#### C: 横浜市港北区菊名6丁目計画

鈴木法明(正面左) 「やすらぎの刻」  
平山健雄 「フランクロイドライトへのオマージュ」

#### D: 浦安市富士見4丁目計画

安部大雅 「光音風」  
渡辺雅夫 「求心力か遠心力か」

#### E: 江戸川区瑞江2丁目計画

堤 一彦 「ON THE EARTH」  
堤 一彦 「YUZURIHA」  
松田静心 「種～」  
信ヶ原良和 「未来への方舟」  
安河内敦子 「井上勝江版画作品 想-6 より  
ステンドグラス」



会場風景 1



会場風景 2



会場風景 3



物件模型

## 第6回 街に飛び出す作品展 推薦作品

### A. 狛江市和泉本町1丁目計画



鈴木法明 窓(会おう) チタン

### B. 世田谷太子堂5丁目計画

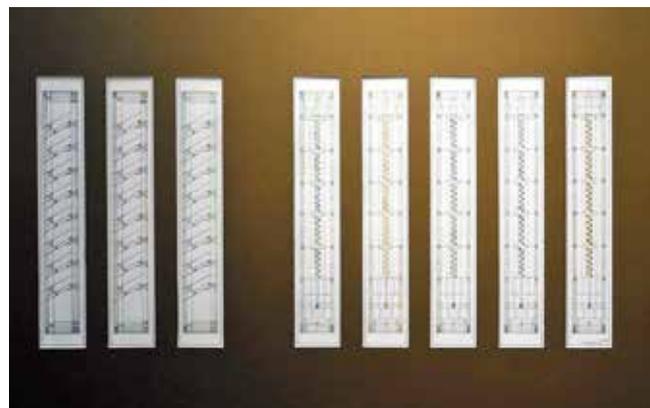


安部大雅 揺らめく白 大理石 ミカゲ石

### C. 横浜市港北区菊名6丁目計画



鈴木法明 (正面左) やすらぎの刻 チタン



平山健雄 フランクロイドライトへのオマージュ イラストボード 水彩

### D. 浦安市富士見4丁目計画



渡辺雅夫 求心力か遠心力か ウォルナット・木粉・漆喰



安部大雅 光 音 風 マケット

E. 江戸川区瑞江2丁目計画



堤 一彦 ON THE EARTH 御影石 (マケット出品)



堤 一彦 YUZURIHA 大理石



松田静心 種～



信ヶ原良和 未来への方舟 鉄・ステンレス



安河内敦子 井上勝江版画作品 想-6 よりステンドグラス ステンドグラス

●応募作品



水谷誠孝(会員) メリーゴーランドの馬と百合  
テンペラ



水谷誠孝(会員) 空をかける頭立ての馬車  
テンペラ



池田嘉文(会員) リズム オブ ラブ  
FRP 台は鉄



池田嘉文(会員) 世紀の曲がり角(ターン オブ  
ザ センチュリー) FRP 台はステンレス



吉野ヨシ子(会員) 宇(ソラ)  
金属



信ヶ原良和(会員) 空とトンボ  
ステンレス ベース鉄



すずき あき(会員) 熱い空気  
絹地 針金



上村伴子(会員) Interaction(インターアクション)  
1点2個組



上村伴子(会員) 青と出会う  
木製パネル・ステンレスミラー板・アルミ板



高須好子(会員) ひかり…空  
ベニア・布



Who+ 望月 勤(会員) 終わるときは始まるとき  
鉄・木



沢口炫三(会員) 天と地と風と  
スタイロホーム、天然土 他



野口真理 (会員) つちの中  
陶土、粉うるし、金属箔



郡 和子 (一般) RYTHEM (リズム)  
ガラス



五十嵐通代 (会員) WALK IN THE SEA  
(ウォークインザシー) 絹、綿、ステンレス線



神 芳子 (会員) 旋回  
籐



中野敦子 (一般) コンプリート  
シルク



須齋尚子 (会員) 昇華 (ショウカ)  
陶



須齋尚子 (会員) 燦 (サン)  
木・アクリル・陶



高松恵子 (一般) 流れ  
布



中嶋クミ (会員) Curious Tones: 絆  
ガラス



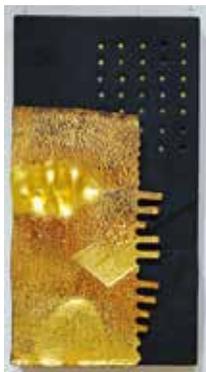
ユール フィル (会員) 10th Day Visitor  
木のパネル キャンパスプリント



山崎和子 (会員) move Time  
染色



神 まさこ (会員) Spiral  
木 錫 錫箔



山崎輝子(会員) 誕(タン)  
牛革・牛床・金箔



松田静心(会員) 幸せを運ぶ猫と繁栄の木



上江洲牧子(会員) あなたのハートはどれですか



神 まさこ(会員) growing up  
陶器 炭 錫



井上勝江(会員) 恋情に涙す  
和紙 木版



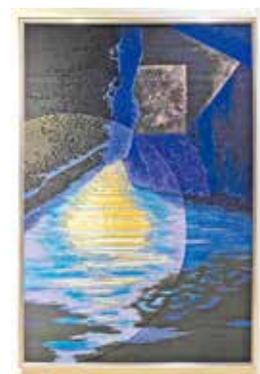
三原 等(会員) 陽の当たる大通り  
紙 リトグラフ



白野順子(会員) サンサーラのオーロラ  
絹



熊木真由美(会員) 作品No. 0  
布



品川未知子(会員) 青のカオス…ロマン



上村伴子(会員) Blue and Azuki Composition  
木製パネル上に岩絵具、アクリル絵具、ステンレス板、アルミ板



小野寺恵美(会員) CLAY SPIRAL  
陶土 高温焼成

## 魅了する糸の世界

テキスタイル造形作家  
日本建築美術工芸協会会員

岡本直枝



去る9月、イタリアでのテキスタイルの国際展 Miniartextile Como に招待出展させて頂きました。お題は pop up。石積みの元教会を3.7mの旅人の作品が歩きました。空間との関係性が興味深い展示体験でした。

これを皮切りに、1月号に五十嵐通代さんがご報告された、イタリア、スペイン、オランダ、ポーランドのテキスタイルアート国際展を巡る旅に私も参加。そこで受け止めた、「魅了する糸の世界」について、3つの視線で書かせて頂こうと思います。

ひとつ目の視線はポーランドで開催された Polish Tapestry 展と Wlodzimierz Cygan 氏の個展で見たタペストリー群です。タペストリーの発祥については、イギリス最北部オークニーの遺跡で合点した事があります。寒風刺す海岸淵。石積み家の石で囲った寝床の壁にかかった毛皮を見た時、家族が身を寄せ合い、風、湿気避けの毛皮に守られて眠りにつく光景が目に浮かび。風避けには愛着が生まれ、織物となって家族を語り、信仰を現し、王を讃える物にもなっていたのだと。

ポーランド現代作家によるタペストリーに描かれていたのは、ルーツ、暮らし、歴史、政治、戦争、自然 etc.。彼等はタペストリーに、様々な思いを込め語って来たのだと実感する作品群でした。さらにシガン氏のタペストリーは、いつまでもそこに居たかった。不覚にも、日本でテキスタイルアートが欧州の様に根付いていない理由のひとつを見た思いです。日本も世界に冠たるテキスタイルの世界がありますが、その基本は着物文化。住居は木、紙、畳など繊維で出来ており。テキスタイルアートの土壌が全く異なる様です。

ふたつ目の視線は、コンセプチャルな作品群と、私的な

内向的な作品群です。この二つは関係性を持ち、現代アートの方向と合致すると思います。特にオランダは私的心情を繊細な糸使いで現した秀作が多く、誰に対しても親しげに接するアムステルダムの人々から、個人の存在を認め合おうとする個人主義が浸透している為かと感じました。日本の若手作家の中にも強く出て来ている傾向です。

もうひとつご紹介したい作品はポーランドの国際展で見たイスラエル作家 Wlodzimierz Cygan による Dresse です。この作品は布をほぐす事と染める事、破壊と創造により作られており、何かの啓示を感じさせます。が、私がこの作品に魅かれた理由はコンセプトよりも造形そのものの美しさ、3つ目の視線です。色糸の一本ずつが交錯して放つ肌合いとハーモニー。そこに惹かれる私は、我ながら日本人だなと思うのです。

日本はやはり工芸的指向が強い国です。美しく完成度の高い作品。しかし強く主張したり、ネガティブな精神世界を吐露する様な作品は少ないので主張が弱いと評価されがちです。が、物で表現する世界に造形美無くして如何に、と言いたい。何より今回の各国の国際展でも多くの日本人作家が入選、入賞。大活躍しているのも確かな事実です。

文化的背景様々なれど、テキスタイルは太古から人と共に、触れ、包み、語り、魅力を放ちます。繊維が日本の建築からめっきり少なくなっている昨今、この親しく人と共に在るテキスタイルアートは如何でしょう？ゆっくりじっくり効いてくれると思います。そして一作家として、テキスタイルの魅力を伝えられる作品に、引き続き取り組んで行きたいと、心新たに致しました。



岡本直枝\_far far away\_370 × 330



Wlodzimierz Cygan\_Proberb III\_190 × 125



Areen Hassan\_Dresses\_180 × 140 × 3

## 立体と平面



染色家  
日本建築美術工芸協会会員  
すずきあき

染色によるパネルやタペストリーなどの平面表現と染めた布を様々に変化させた立体表現を制作して発表しています。

染めという技法を使った平面と立体との二つの表現は、いずれも興味深く同じテーマを平面立体の両方で表現し発表したこともあります。そしてこの二つの表現は長い間染めに携わった道筋から自然に生まれてきた様に思います。

インテリアデザインを学んでいた学生の頃、インド更紗と出会い染の世界に強い興味を持ちました。白い布を思い通りの色や柄で変えられるのはとても魅力的でウインドウディスプレイを目指していた私は自分が染めた布をディスプレイに生かせないかと考えたのです。

染めを学ぶなら最も高度な技術を使う着物の世界が一番と言われ卒業後に着物の工房に弟子入りし3年間友禅染やロウケツ染めの技術を学びました。

当時東京の神田川周辺には伝統の技術で着物に絵付けをする職人さんが沢山居て着物の世界を支えていました。私が入ったのもそうした小さな工房の一つで徒弟制度という異次元の世界に戸惑いはありましたが、ぶっつけ本番で反物に描いていく緊張感や長い工程を経て仕上がった着物の美しさなどの感動もあり、修行の3年間は瞬く間に過ぎて行きました。独立後も継続して京都の間屋の仕事をしていましたが、着物を染めたくて入った訳でなく制約の多いこの世界は私には不向きでした。そして、このまま続けていたら抜け出せないかもしれないという怖さもありました。

この世界から脱皮しようと思い切って仕事を辞めイタリアのフィレンツェに渡り再び学生になったのは33歳の時で

す。原点に戻ってデザインや色の勉強をし直すというのが仕事先への言い訳でした。渡伊によって自分の世界が広がったと同時に日本の文化を客観的に見直すことが出来ました。

帰国後、自分なりに自由な表現ができるようになった頃、今は廃車となった JR 北斗星のピアノラウンジ車両内の壁面ディスプレイの仕事を受けました。東京、札幌間にある20以上の都市の花を友禅染で描き小さな額に入れて壁面を構成しました。

この仕事がきっかけになり商業施設などのウインドウや壁面を布を使ったディスプレイをする仕事に少しずつ移行していきました。

その頃から布の立体表現を意識し始めたのです。壁面や空間を演出するのは平面の布より立体の布の方が楽しいのではないかと、作品が動くときも動くし、光や風によって色や表情も変わる—そう思いました。

染色での立体と平面の違いは立体が感性重視であるのに対し平面が技法重視と考えています。空間の中で重なり合う色や風の動きで偶然にできる形など立体作品は周囲の空気と一体化します。一方平面作品はそれだけが自己主張するので色やデザインを表現出来る染色技術が無いと強さに欠けます。立体平面は全く違う表現方法ですが、私の中ではその二つは刺激しあい反発しあいながら融合していきま

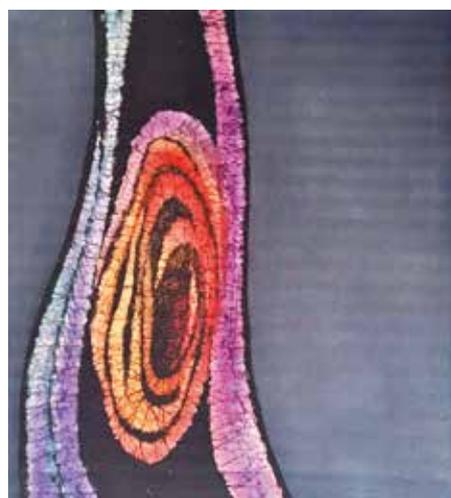
す。師を持たなかった私はいつも試行錯誤しながら制作し、評価を問う為に発表を続けてきた様に思います。今後もずっと悪戦苦闘は続きそうです。



絞り染タペストリー 海の月  
90 × 240



ロウケツ染パネル 渦1 70 × 70



ロウケツ染パネル 渦2 65 × 65

# 「出合う力」を信じて

造形作家  
日本建築美術工芸協会会員

上村伴子



昨年11月、新制作協会会員の五十嵐通代さんのご推薦を頂き aaca の会員になりました。私がステンレスミラー板に魅力と面白さを感じたのもミラー板が、ふとした面白さ、美しさの出会いをもたらしてくれると気づいたからです。二次元の絵画表現の中にミラー板が入ると、そこに動く三次元の世界が生まれます。私の作品は立体も絵画とも色面の造形のみ構成なので、その中に周りの変化する動く景色が映ると思わぬ面白さ、美しさが出現します。特に自然の木々や光が映った時はとても美しいものが生まれます。自然光の移ろいや人工のライティングによっても同じ作品

が全く異なった作品へと変容していきます。そして、金属板と岩絵具、漆喰、土、布、和紙などの天然素材は相性が良いことが分かりました。

これらの素材の組み合わせによる美しさを表現していきたいと思っています。

(プロフィール)

2016年 新制作展絵画部門入選

2017年 〃 グループ展

2018年 新制作展絵画部門、スペースデザイン部門入選 グループ展

2019年 〃 〃 初個展



< Cogela >

自然光と人工照明の違い暗い室内でのスポット照明によりステンレス版が黒い色面が変わり、もう一つの作品が生まれる。



< Miracle >

2018年 新制作展スペースデザイン部門入選作品。



<出合うカー青と直角の場合(屏風)>



< Unexpected Joy >

2019年 新制作展絵画部門入選作品。



< Canna >

室外の紅葉の木々が、ステンレス版へ反映。四季を通して変化して行く。



< Interaction >

2019年 新制作展スペースデザイン部門入選作品。

# ごあいさつ

鉄のオブジェ職人  
日本建築美術工芸協会会員  
**永井ゆきお**



石川県出身。金属（主に鉄）を使ってオブジェを創っています。

小さく切断した鉄板を、ハンマーで叩いて曲げ、溶接して形創っていきます。

有機的で丸い形が好きです。

普段は現場仕事で生活の糧を得て、製作はたまにというペースでやっています。



エメット



ポスト



宇宙船



ヤドカリ製作風景



生活工房での展示風景



赤月



夜に咲く花



薬（ひこばえ）



跋扈（ばっこ）

# 株式会社久米設計 Part 1

広報委員会

本号から「法人会員の設計事務所を訪ねて」と題してシリーズでお届けします。

初回は株式会社久米設計です。

Part 1 では会社の沿革や特徴などについて、次号 Part 2 では代表的な作品などをご紹介します。

## 久米イズム

株式会社久米設計は、1932年創設者・久米権九郎氏により創設された建築設計事務所です。

この歴史ある久米設計には創設者から脈々と受け継がれてきている3つのルーツがあると言います。

それは、

- ①大規模開発のルーツ
- ②耐震・防災技術のルーツ
- ③グッドテイストのルーツ

この3つのルーツは久米設計のDNAの中核をなし、あらゆるジャンルの建築設計に継承されています。

創設者・久米権九郎氏の建築は日本ではなくドイツで学んだことが始まりでした。1923年27歳でドイツに渡り1929年シュトゥットガルト大学で博士号を取得して帰国し、1932年に久米建築事務所（創設時の事務所名）を開設します。そのため権九郎氏は建築を吸収する初期段階で当時の日本建築界における通念や趣向の影響をほとんど受けず、また日本の近代建築家のつながりの中に位置づけることもされてこなかったと言います。ドイツで形成されたその建築観は当時の日本の建築家たちとは異なるものでした。

権九郎氏は留学中、ドイツがジードルンク（集合住宅）の建設などにより第一次世界大戦の敗戦から復興していく様子を目の当たりにし、住宅の問題に大きな関心を持つようになりました。そのため日本の敗戦後、久米建築事務所は住宅問題に向き合い集合住宅（公団団地）の設計に積極的に取り組むこととなります。このことが久米設計の大規模開発を担う高い技術力や組織力の原点となっています。

また権九郎氏は博士論文「日本の住宅の改良」で、関東大震災による建物被害の紹介と考察に多くのページを割き、耐震性や防火性、防犯性を高めた「新住宅」を提案しています。そこで提案した構法が「久米式耐震木構造」で、これが久米建築事務所草創期の多くの建築に用いられ、耐震性や防火性に優れた建築作品が生まれ出されました。それらの作品のいくつかは木造でありながら現在でも利用され続けているそうです。

久米設計が前述の3つのルーツを継承していく決意とも言える声明文をご紹介します。

「日本ほど災害が多発する地勢や気候をもつ国は、世界でも稀である。しかし私たちは、こうした日本にしっかりと軸足を置き、そこから世界へと躍進する建築設計集団でありたい。限りある資源の有効活用を図り、受け継がれてきたこれら3つのルーツをさらに深化させながら社会貢献していくことが、私たちの使命だと考えている。」



久米権九郎氏



軽井沢万平ホテル（現存）



日光金谷ホテル（現存）

久米設計のポリシーを表す名文が久米設計の著書の中にありますので引用してご紹介します。

### 創設者の想いを継承する

#### 「アトリエ型組織設計事務所」

1932（昭和7）年、久米設計は久米権九郎によって創設された。

久米設計は、日建設計や三菱地所設計、NTT ファシリティーズのような、旧財閥系企業や元国営企業の営繕部門から出発した設計事務所ではなく、日本設計のように大手組織から枝分かれしてできたものでもない。個人の建築家事務所（アトリエ事務所）として生まれ、600人を超える組織に成長した事務所である。久米設計のほか、石本建築事務所、佐藤総合計画、東畑建築事務所、松田平田設計、安井建築設計事務所、山下設計などがこのグループに属し、それらの多くがこの昭和初期に創設されている。

現代のトヨタ自動車に豊田佐吉氏の精神や企業理論があり、現在のソニーが盛田昭夫氏や井深大氏の理念を引き継いでいるように、久米設計も、創設者・久米権九郎の、建築家であると同時に事業家でもあったがゆえの精神を受け継ぎながら進化してきた。

「アトリエ型組織設計事務所」という造語をあえて挙げているが、これは、建築に対する“創設者の想いの原点”を常に確認しながら、設計者の個性を大切に設計活動を通して、社会に貢献していきたいという覚悟を示すものである。

—建築はその土地から生えたものでなければいけない

—まず、丈夫な建物を造るという概念を忘れてはならない

—デザインと技術の融合

創設者・久米権九郎の言葉は、今日も私たちの活動の根底にある。

今日のいわゆるアトリエ型事務所のような、一個人の建築家のみ依存し「先生」がいなくなったら終わってしまう建築家事務所ではない。自らが携わった建築が、50年、100年と生き、また、未来の都市のスカイラインをつくり続ける限り、その主治医のような存在として、いかなる側面からもサポートし、診続けられる。そうした一人ひとりの顔が見える「アトリエ型組織設計事務所」でありたいと私たちは考えている。

「組織設計事務所が挑む 都市と建築の提案 久米設計のプロジェクト」より

（田島一宏）

#### 本社ビル

- 所在地 東京都江東区潮見2-1-22
- 建 物 鉄骨鉄筋コンクリート造  
地上7階・地下1階・延べ床面積10,163.555㎡
- 竣 工 1993年6月



南側外観



アトリウム全景



アトリウム打合せスペース

## 母校訪問

# 女子美術大学・女子美術大学短期大学部 (相模原キャンパス・杉並キャンパス) 訪問

陶造形作家 新制作協会会員  
日本美術家連盟会員  
CAFN 協会会員 日本建築美術工芸協会会員  
野口真理



広報委員会のなかで会員の母校訪問記掲載の企画をしてはどうかと話し合われました。初回は広報委員で女子美術大学同窓の山崎輝子氏、五十嵐通代氏、私、広報委員長飯田郷介氏の4名で取材することになりました。

2020年が明けて間もない1月17日神奈川県相模原市にある相模原キャンパス内食堂「SWITCH」に集合しました。まずはお腹を満たして休憩したのち探索が始まりました。

山崎輝子氏は女子美術大学に作品が収蔵されており、五十嵐通代氏は数年前に社会人入学をされ卒業されています。女子美(通称)にゆかりの深い訪問者です。私は同窓会埼玉支部会員作品展の継続企画「埼玉県出身、学生作品特別展示」で事務局を担当していて、大学・同窓会の協力のもと総務企画部の玉田里佳子様、友部徳寿様にお世話になっていました。訪問当日、特別なスケジュールもなく構内を散歩し写真撮影でもと考えていたところ、広報グループ守屋真奈美様を紹介され、思いがけなく今回の訪問の動線を助けていただきました。キャンパス内を守屋様の説明を聞きながらの散策。冬の温かな日差しのもと長閑な自然の中をゆっくり移動しながら図書館の外観を眺め、野外休憩のためのスペース、創設者銅像の前に取材しつつ歴史に思いを馳せました。今年が女子美術大学の創立120周年にあたり「時」の一つの区切りにキャンパスをめぐることができたのは感慨深かったです。山崎輝子氏は、半世紀前、多感な付属高校時代から大学を卒業するまでの7年間通った杉並の住宅内に位置する校舎風景と現在、自然豊かな多摩丘陵の中にあるコンテンポラリーな建物と彫刻群が点在するキャンパスを目の前にして、当時から漂っていた女子美独特の空気感、artisticで品の良いイメージは消えていないように思えたと言われました。五十嵐通代氏は、60歳の時に社会人入試で入学しました。若い同級生と課題に没頭する毎日でした。卒業制作は好きなだけ創作活動が出来素晴らしい時間でした(2016年卒)と気持ちを語ってくださいました。

女子美術大学は、明治33(1900)年、女性に門戸を開く美術の専門教育機関がほとんどなかった時代に「芸術による女性の自

立」、「女性の社会的地位の向上」、「女性の芸術教育者の育成」を建学の精神として横井玉子先生(1854～1903)により本郷区弓町2丁目に私立女子美術学校が創立されました。そして昭和10(1935)年杉並区和田本町(現在の杉並区和田)に女子美術専門学校として移転。昭和25(1950)年学制改革により学校法人女子美術大学、短期大学部を併設。平成2(1990)年相模原校舎を開校し、平成10(2000)年創立100周年記念式典挙行されました。今年令和2(2020)年創立120周年を迎えます。

長い歴史の中で、画壇・デザイン界をはじめ、教育界など幅広い分野に人材を輩出されています。日本芸術院会員の皮革工芸家・大久保婦久子先生、日本画家・郷倉和子先生、片岡珠子先生がおられました。近年では理事長にノーベル生理学医学賞を受賞された大村智先生が就任されていました。

女子美術大学では、きめ細かな教育組織が、相模原と杉並で連携されています。相模原キャンパスでは、芸術学部(4年制)美術学科(洋画専攻、日本画専攻、立体アート専攻、美術教育専攻、芸術文化専攻)。デザイン・工芸学科(ヴィジュアルデザイン専攻、プロダクトデザイン専攻、環境デザイン専攻、工芸専攻(テキスタイル|染・織・刺繍)、陶・ガラス)。杉並キャンパスでは、芸術学部アート・デザイン表現科(メディア表現領域、ヒーリング表現領域、ファッションテキスタイル表現領域、アートプロデュース表現領域)。短期大学部 造形学科(2年制)|美術コース、デザインコース(グラフィック・メディア・テキスタイル・スペース)|

専攻科(1年)(造形専攻)。相模原/杉並キャンパスでは、大学院美術研究科(博士前期課程・後期課程)となっています。

今回、総務企画部の玉田様、友部様のご厚意により、先生が授業で来られている研究室を訪問することができました。それぞれの研究室で先生から説明を受けながら移動です。周囲には学生もおり、授業の合間での見学となりました。工芸学科の実習室では、テキスタイルの卒業制作の講評会中でいずれも力作揃いでし



工芸専攻染織実習室内



「未来を拓く扉」をコンセプトにリニューアルされた相模原キャンパス正門



五十嵐通代氏(左)、山崎輝子氏(中央)。工芸専攻実習室内



図書館



野外フリースペース (様々なシーンで変化)



た。撮影は遠慮し、やや離れて見学しました。他者に評価されながらまた影響を受けながら作品は変化していくものですが、若い学生の緊張した表情は見る側の心持ちぴんと張りました。制作が終了してがらんとした染織の実習室は道具類がきちんと整理され次の作品作りを待っているようですがすがしい空間でした。制作者が道具を取りに来られ染織の専門的な説明を聞きながら贅沢な時間でした。陶芸実習室へ移動。作品制作途中の段階だったり、成形完了作品が乾燥中であつたりと稼働中の実習室を見ることができました。立体アート専攻のエリアは野外での作業もあり恵まれた広い敷地に位置していました。周辺には木彫素材になるであろう大きな切り株がごろごろと置かれていました。迫力です。実習室内には金属素材、陶素材で制作中の立体がところ狭しと点在していました。いずれも大型です。先生、学生は作業着を着用し力仕事でした。野外には、随分と前の作品も展示後置きっぱなしになっているよう見受けられ、それがまた作品の肥やしになっていくように感じられました。

女子美アートミュージアムは、2001年にオープンし様々な企画展がかけられています。この日は、退職職員記念展藤倉久美子教授の作品を展示中で大らかなたっぷりとした作風に思わず長居をしてしまうほどでした。

2015年に誕生した多目的空間ギャラリー Joshibi SPACEでは、特別展「蘇る。ふるさとの宝物」一東日本大震災で被災し安定化処理された染織文化財パネル展示一が開催されていました。「津波により被災した文化財の保存修復技術の構築と専門機関の連携に関するプロジェクト実行委員会」に女子美術大学が関わった仕事展示されていました。また2016年に設立された染織文化資源研究所の設備(長さ13mの友禅流しの大型染織水槽等)を見学できたことも忘れられません。豊かな設備で学べる学生の気持ちに触れることができたような気がしました。

模原キャンパスを1号館から13号館までポイントをもって見る



洋画専攻実習室



立体アート学科専攻実習室



洋画専攻研究室 (階段での展示)



歴史資料展示室 (杉並)

ことが可能になり、総務グループ、広報グループの皆様には心からの感謝を申し上げます。散策の最後には総務企画部で確認後、aaca 会員松田静心氏からの紹介文を持って洋画専攻研究室の扉をノックしました。松田氏の友人でもある 大森悟教授との茶話会では女子美洋画の現在を見せてくださり楽しい時間になりました。卒業制作の講評会が終了したところに伺ったせいなのか、皆さんとてもリラックスされていました。ありがとうございました。

翌日、私は杉並キャンパスへ幹事運営委員会のため出かけることがあり取材を続けました。卒業の時(1977年卒)、記念撮影の場所だった懐かしい「ニケ像」を見つ7号館に位置する「歴史資料展示室」へ移動しました。2014年に開催された「横井玉子・藤田文蔵と私立女子美術学校創立展」の資料の一部が展示されていました。奥に置かれている洋装と和装が融合されたような衣装は、当時の女子に相応しい「女子改良服」案(横井玉子先生デザイン)の復元制作されたものです。

2日間母校を見ることができ、ゆったりとした[時]が私の中に入ってくるような印象をうけました。

#### 参考文献

- 「女子美術教育と日本の近代」
- 女子美術大学歴史資料室 [編] 2010年
- 「美の原点」青木純子 1999年
- 「二つの星」山崎光夫 2010年
- 2020 女子美術大学
- 女子美術短期大学部 大学案内

(掲載写真については、事前に申請し撮影許可を受けています。)

## 景観シンポジウム委員会だより

### aaca 景観シンポジウム

# 「場の力で多様な価値を繋ぐ」ということ

株式会社山下設計  
日本建築美術工芸協会法人会員  
水越英一郎



今、世界ではSDGsに代表されるように持続可能な開発目標の設定とそれを実現するための方策の立案が求められている。産業革命以降、世界中が経済成長を目標に掲げ、その中で多くの革新的技術を生み出してきた。これにより私達の生活がそれ以前に比べて飛躍的に便利になったことは事実である。その一方で、化石資源の無計画な利用や消費エネルギー量の爆発的な増加、さらには環境破壊等、多くの課題が生まれた。経済・社会・環境の持続的成長とは何か、そして、そのようなことは本当に可能なのだろうか。今回のシンポジウムでは、「場の力で多様な価値を繋ぐ 私達はどのような価値基準で建築・都市を考えるのか? ~早稲田アリーナ等を通じて~」と題し、未来の建築・都市の在り方について、幅広い視点から考えることとした。

モデレーターには早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 佐々木葉教授をお迎えし、これに早稲田大学 37 号館 早稲田アリーナに携わった発注者 (= 早稲田大学キャンパス企画部 調査役 北野寧彦氏)、建築家 (= 山下設計 水越英一郎)、ランドスケープデザイナー (= プレイスメディア パートナー・多摩美術大学 教授 吉村純一氏)、環境設備設計者 (= 清水建設 笠原真紀子氏) の 4 名を交え、それぞれの立場から現状の課題、さらには持続性に優れた建築・都市の在り方について、講演とパネルディスカッションを行った。

講演は佐々木葉教授による「風景的思考によるデザイン ~時空・社会・私をつなぐために~」からはじまった。鎌倉の景観保存を例に掲げ、風景の在り方が地域に与える影響や、風景を媒体とした、ひとりひとりの「私」の内面に生じる気持ちとそれを共有したいという感情が社会の持続性を高めることに繋がるという論理展開で「風景的思考によるデザイン」を解説した。講演の中で佐々木葉教授は、SNS に掲げられた早稲田アリーナの多数の画像を見せながら、どれだけ多くのレイヤーをデザインのテーブルにのせることができるか、どれだけ異なる視点をデザインのプロセスに組み込むことができるか、どれだけ違った場面をそこに重ねられるかといったことが、これからの建築や空間デザインに求められるとした。

続いて、北野寧彦氏から「早稲田のキャンパス整備」と題して、キャンパス整備方針や持続性のあるキャンパス整備の在り方について語られた。キャンパス整備指針の骨子として、キャンパスを交流の場と位置づけ、周辺地域との良好な関係の形成や、「心のふるさと」にふさわしい環境として整えることを重視していると解説した。また、持続性のあるキャン

パス整備については、大学と周辺地域が一体となった発展を掲げ、近年の様々な取り組みが紹介された。その中で、都市景観に配慮した緑の維持も重要だが、休日にも地域の方々が自由に入出りできる公園のようなキャンパスの実現を目指しているとし、早稲田アリーナの特徴である「戸山の丘」の意味を語った。

私からは「一つの建築にできること」と題し、実務としての建築設計は物理的な制約として固有の敷地内で計画せざるを得ない一方、計画に際しては、地域の歴史や生態系、環境など広域的な視点に立ったアイデアの創出や、それらを統合し、単体としての建築だけでなく、周辺地域も含めた価値を向上する場の在り方についてお話をさせて頂くとともに、その一例として、早稲田アリーナでの取り組みを紹介した。

吉村純一氏からは「歴史をつなぐ 風景をつなぐ まちとつなぐ 緑をつなぐ つなぐ」と題して、これまでの実作を通じたランドスケープアーキテクトとしての活動が語られた。講演のまとめとして、繋ぐということ「異なっていることを認め合うこと、異なっていることを共有すること」と位置づけ、多様な価値に対して、どのように対峙していくべきかについて述べられるとともに、作りだした場での楽しい気な人々の活動の様子が紹介された点が印象的であった。

講演の最後には笠原真紀子氏より「設備設計者として持続性の高い建築を考える」と題して、ZEBの意義やそれを実現するための手法等が語られるとともに、早稲田アリーナでの運用実績とそこから見えてきた課題が紹介された。早稲田アリーナはZEB Readyの認証を受けている一方、高度な機能を備えているが故に、ユーザーがより良い環境を求めて想定外の運用をしてしまい、現状のエネルギー消費量が計画と乖離してしまっていることや、それを改善するための運用組織の在り方等、これまでの景観シンポジウムとは異なる視点で、建築・都市の持続性の在り方について語った。

後半は、登壇者によるパネルディスカッションを実施した。佐々木葉教授の「大切なのは / 様々な工夫をしなければ / 目に見えない」というキーワードを皮切りに、多様な価値を繋ぐためには、「共感」を得る仕組み = コモンセンスが重要な意味を持つことなど、幅広い議論が交わされた。今回のシンポジウムでは立場の異なる登壇者が一つのテーマで議論することで、未来の建築・都市について考えた訳であるが、建築・美術・ランドスケープ等、多分野の融合による課題解決という点ではaacaの活動にふさわしいものになったのではないかと感じている。

調査研究委員会だより

# 調査研究委員会視察研修報告 2019年4月26日 益子



調査研究委員会委員長  
南三一郎

宇都宮在住の建築家藤原宏史氏の案内により陶器市前日の益子に向かった。参加者は調査研究委員会の小野寺委員夫妻、犬飼委員、七字委員、山本委員、南。宇都宮から益子に向かう国道123号水戸街道に沿って、「海の幸」で画壇に注目された画家青木繁が、もう一つの大作「わだつみのいるこの宮」を製作した黒崎家を望む五行川々畔に、当地出身の恋人福田たねとの由来の碑が設けられている。その碑を制作したのが、ハンガリーから日本に帰化した彫刻家ワグナー・ナンドール（1922.10.7-1997.11.15）である。ワグナー・ナンドールは彫刻家、建築家、哲学者。共産圏時代のハンガリー出身。学生時代に建築学・解剖学・彫刻を学び、第2次世界大戦に志願し重症を負う。ハンガリー動乱の際に、中心的活動家であったナンドールはスウェーデンに亡命。そこで秋山ちよに会い結婚、1969年移住のため来日した。1970年、栃木県益子町にアトリエを建設し、没後の現在もアトリエと美術館が一般公開されている。ハンガリーではその後復権し、ハンガリアン・コープス（1951）、ブダペスト市ゲッレールト山に「哲学の庭」建立（2001）が代表作となる。今回の研修会のメインテーマとなる人物である。

益子の街は明日の陶器市開催に向けて、目玉商品の陳列や屋台の設置に余念が無い。益子に至る道は一本道で、当

日は来訪者で身動きが取れないという。ナンドール美術館はやや山を上った、山間の静穏な環境に静かに佇んでいた。ナンドールの作品は聖人などのブロンズやテラコッタの人物彫刻が主で、哲学的な深い人物描写が特徴である。美術館は屋外の「哲学の庭」を中心に、いくつかの棟に分かれて、大作、小品など細やかな展示の仕方がなされている。案内の藤原宏史氏はその保全と整備計画に現在も携わっておられるとのこと。展示には石膏原型が多く陳列されているのも注目に値する。アトリエはナンドール自ら設計し、天井高く、北面光が大きなプロフィリットガラスを通して入光し、穏やかな空間構成である。ハンガリアン・コープスや多くの素描、彫刻土台が残されており、制作過程が垣間見えるようで興味深い。ワグナー・ナンドールについては殆ど予見がなく、新鮮に作品に望んだが、極めて高度な描写力と選ばれたテーマに作者のキャリアを重ねて深い感銘を受けた。

ナンドール美術館ギャラリーでは写真家中村裕紀氏の個展を拝見し、陶芸家の故成良仁別名南田是也氏なんだこれや、現在は夫人の由起子氏が作陶を続けるアトリエにも案内頂いた。

宇都宮を去るにあたり、参加者全員で餃子に舌鼓を打ったことは言うまでも無い。



ガンジー像



ハンガリアン・コープス



青木繁とたねの碑



哲学の庭



青木繁碑・遠景に黒崎家を望む

## 展覧会委員会だより

# 『街に飛び出す作品展 現地設置作品記録展』の初開催を終えて

展覧会委員会委員 松田静心

令和元年12月7日（土）～12月11日（水）、建築会館1F ギャラリーにて、『第1回～5回の街に飛び出す作品展』で選出され、現地に設置された作品を写真で振り返るというテーマの元、今後の設置と展開につなげる機会として、『現地設置作品記録展』を開催いたしました。

株式会社スタートCAMの協力を得て、2014年の第1回開催から6年目を迎え、建築と美術と工芸が対等に活かし合い、豊かな空間と景観の創造の実現を目的とした活動の記録として、一般の方はもちろん、協会会員の皆様にもご覧いただく最良の機会となりました。

『街に飛び出す作品展』での展示と作品選出から、『街中ミュゼ』での設置に至る経過と、活動の実際をヴィジュアル化することで、具体性を持ってより明確にできたのだと思います。

また、「何となくイメージしていた、パブリックアートという概念を具体化できました」との声や、「一つの建築計画に設置された作品を選んだ、或いは選ばれた理由を知りたい」との話も聞かれ、パブリックアートとしての視点からも、これまでの実績と今後の展開の可能性を再認識し、実現に向けて多大な尽力をされた諸先輩方の思いも実を結んできている、という実感を持つ機会ともなりました。

最後に、今後の課題として、作家、建築設計者（または建築設計企業）、物件オーナーによる環境とアートとその連携に関する意識の向上と共有が欠かせないものとなり、この活動の役割をより明確にしていくことの必要性と、活動そのものの社会的価値と意義を高め、様々な方々の協力の元、継続することの重要性を理解し、取り組むべき有意義な活動であるとの再認識を持つ展覧会となりました。この場を借りて、関係者皆様のご尽力とご協力を賜りましたことに心より感謝を申し上げます。



# 「市中の山居」を探るキーが“東京の池”に？



文化情報委員会委員長  
坂上直哉

一昨年（2018.11.30）、東京藝大で開催した当委員会主催の座談会「市中の山居」は予想外の盛況で、後日、次回を望む声が多く寄せられた。しかし、冷静に振り返ってみると、「市中の山居」の核心には入っていけなかったということが委員の一致した意見だった。

## <心を揺籃した風景>

そこで、情報文化委員会では、今後このテーマをどのように発展させていくかを話し合った。その結果、まず、各委員が「心を育み、自身を優しく包み込んだ大切な風景」を①思春期前と②大学以降（都市に住み始めてから）の2つの側面から挙げてみようということになった。

春先の雪に芽吹く福寿草、裏路地、クローバーの原っぱ、地域の生垣や桜並木、ジャズ喫茶、飲屋界限、海辺の風景、磯溜まり、神社の階段…大切に思える様々な風景が語られた。

ところが、どの委員の挙げた原風景も、今では既に失われ、継承されていなかった。それどころか、各人が東京に住み始めてからの「心を育てた風景」も大きく変わってしまっていた事実、全員今更ながら愕然とした。

東京は、日本は、世界は、目まぐるしく変化している。江戸時代の変化速度が1キロとすると、現在は80～100キロのスピードで疾走しているようだ。人類史上、最も高速な環境変化の中に生きている。それは止まるどころか、今や第3次産業革命（コンピューターの時代）を過ぎて第4次産業革命（コネクテットの時代）\*に入ろうとしている。モノのインターネット（IoT）、ロボット工学、AIなど、新たな技術が疾走し、さらに加速し、この先に遭遇する風景は霧に包まれている。このように物と情報の関係が激変する状況下で「市中の山居」の意味するものは何だろうか。

## <自然と繋がる風景>

それぞれが挙げた「心を育てた風景」を注意深く見ていくと、ほとんど建造物が挙げられていなかった。一方、共通していたのは、どこか自然に繋がっている風景だった。商人の町・堺で生まれた「市中の山居」。ヨーロッパのギルドでは出てこない発

想だろう。都市にあっても自然との生感覚を取り戻していかないと魂が枯れていく…など議論が弾んだ。

このようなことから、情文として「市中の山居」を仮に定義づけてみたところ、「都市の中で、自然とどのようにつながるかの方策だ。都市の中にあり、人工的、文化的でありながら、自然とつながっているところを指す。」となった。

そして、具体的には、1人の委員が挙げた「市ヶ谷の釣り堀」がヒントになって、「東京の池」をテーマに「市中の山居」を考えていくこととなった。

## <東京の池巡り>

東京は水の都として川や水路は多く論じられているが、池に関する考察はほとんど見当たらない。池は風景、文化と密接に結びついている。何よりも池は簡単に埋め立てられる。残そうという意思がないと残せない。どのようなことから池は残ったのだろうか。

池を通して「市中の山居」が意味していることが見えてくるのではないだろうか、早速、代表的な4つの池を巡ってみた。

第1回池巡り（2019.10.12）六義園、三四郎池、不忍池（参加者10名）

第2回池巡り（2019.12.14）小石川後楽園（参加者9名）

池巡りの共通テキストとした小沢信男/富田均著『東京の池』によると、4つの池はいずれも江戸時代に整備され、主に大名庭園の池だった。たった4つの池からも様々なことが見えてきたが、東京にはもっと異なった成り立ちの池もあるはずだ。

私たちモノづくりが、現代の過激な時代の潮流に呑み込まれないためにも、また、次世代に引き継ぐ風景を創出していけるように、情文では引き続き池巡りを続け、機に応じてレポートや座談会などで発信していきたい所存だ。

\*18世紀の第1次産業革命（機械の時代）→第2次産業革命（電力・電子の時代）→第3次産業革命（コンピューターの時代）→第4次産業革命（コネクテットの時代）→超スマート社会？



不忍池馬見所にて明治天皇と昭憲皇后、天覧試合を観戦（大江戸歴史散歩を楽しむ会）



都ボランティアガイドが庭園の奥深さを語ってくれた六義園



都心にありながら深山幽谷の趣の三四郎池

## 事務局だより

### ■新入会員・会員の異動 2020年●月～2020年●月(敬称略)

個人情報保護法により、個人会員は氏名・活動分野、法人会員は会社名・代表者氏名・担当者氏名・住所・電話のみ掲載いたします。

#### 《新入会員》

個人会員	線 幸子(美術家)、加藤 聖(美術家)、 酒匂克之(建築デザイナー)、武石正宜(照明デザイナー)、 常松欽治(陶芸家)
------	---

#### 《会員の異動》

個人会員	横河 健	住所変更	〒151-0053 渋谷区代々木 5-7-12 TEL.03-3466-3631 FAX.03-3466-3633
法人会員	(株)クマヒラ	担当者変更	企画本部 企画部 村岡謙次 (前任 安部功嗣)
	(株)エクシズ	担当者変更	代表取締役 笠井政志 (前任 山本新也)

## 会員交流委員会だより

### ■令和2年度 芦原義信記念杯

5月15日(金曜日)

若洲ゴルフリンクス 江東区若洲 3-1-2

## 展覧会委員会だより

### ■令和2年度 BOX展

6月5日(金曜日)～11日(木曜日)

建築会館ギャラリー(東京都港区芝 建築会館)

## 文化事業委員会だより

### ■第29回 AACAA 賞受賞者紹介のつどい

令和2年度 第1回 6月4日(木曜日) 午後5時より7時  
第2回 7月14日(木曜日) 午後5時より7時

サンゲツ品川ショールーム 曜日と日付どちらが正しいですか  
港区港南 2-16-4 品川グランドセントラルタワー 4F

## 会員増強委員会だより

### ■第3回 aaca サロン

6月4日(木曜日) 午後5時より7時

マラツイ・ジャパン・ショールーム 中央区銀座 6-4-1 東海堂銀座ビル 6F

## 総務委員会だより

### ■令和2年度 通常総会

6月11日(木曜日) 午後5時45分より

建築会館大ホール(東京都港区芝 建築会館)  
議案 1、令和1年度 事業報告・決算報告  
2、令和2年度 事業計画・事業予算案

## 表彰委員会だより

### ■令和2年度 AACAA 賞

応募受付 7月1日 応募締切 9月11日

詳細は協会ホームページをご覧ください。

## 編集後記

●本号から開始した「法人会員の設計事務所を訪ねて」の取材で株式会社久米設計をお尋ねしました。当初の企画は東京オリンピックの競技施設の設計に関するエピソードを伺うというものでした。ところがオリンピック施設の記事にするには東京都の許可が必要であり、その手続きには大変な時間と手間がかかってしまうことが取材を通して判明したため残念ながらその企画は断念しました。しかしそのお陰で久米設計の公共建築の最新作をご紹介いただけることになりました。その作品は次号でお届けする予定です。

今回の取材では久米設計のご担当の方々に大変ご丁寧にご協力いただき、また貴重な資料も快くご提供くださいました。紙面を借りて御礼申し上げます。(田島一宏)

●本号から始まりました「母校を訪ねて」の取材で普段からお世話になっている母校を一步引いた距離感で取材できる機会になりました。今後、母校を訪ね、現在の母校の姿を会報で紹介することができますので、連載として会員の皆様につないでいただければと思います。(野口真理)

●久々に母校を訪問しました。母校訪問のひと時は、半世紀前のセピア色だった思い出の風景が色鮮やかに蘇りました。帰宅後、断捨離を免れた学生時代の油絵やスケッチブックの埃をはたき眺めながら、当時の瑞々しい感性の再生を願った次第です。(山崎輝子)

●今回母校を訪問した三人は、杉並キャンパスで学びましたが、訪問した相模原キャンパスのスケールの大きさに感動しました。女子美術大学の広報の方々に相模原キャンパスの校舎の内部を案内していただき、はつらつとした学生さんの活動を拝見し、母校のこれからの発展を感じられる機会となりました。(五十嵐通代)

●aaca は主催展覧会を年2回開催しています。「街に飛び出す作品展」と「BOX展」です。会報では、展覧会ごとに開催報告と出展作品の紹介をしています。展覧会のページを作成するにあたり、作品写真と作家名、タイトルなどの照合を何回も行うのですが、その作業をしていると、作家の人物像が作品を通して感じられ、まだお会いしたことのない会員の方にもお会いできたように思い、楽しい気分になってきます。展覧会は回を重ねるごとにaacaの事業として盛んになり、会員作家の幅の広さを実感しています。84号から表紙には、これまでの「街に飛び出す作品展」で設置推薦された作品の写真に掲載しています。モザイクのように組み合わせた写真からは、展覧会のテーマやその時の雰囲気を感じていただけたと思います。7月には「第4回BOX展」を開催します。ご期待ください。(中村弘子)

## aaca 2020.4 no.87

発行人 会長 岡本 賢  
発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会  
〒108-0014  
東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階  
TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598  
URL <http://www.aacajp.com>  
E-Mail [info@aacajp.com](mailto:info@aacajp.com)

編集 広報委員会  
委員長 飯田郷介  
副委員長 野口真理 田島一宏  
委員 五十嵐通代 石田真人 置鮎早智枝  
工藤康博 竹生田 正 中村弘子  
松本治子 三上紀子 森田高年  
山崎和子 山崎輝子 山下治子  
吉田 誠

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション